

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月 26日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21401021

研究課題名（和文） 言語・文化調査に基づくイラワジ・サルウィン流域諸民族の歴史の解明

研究課題名（英文） Linguistic and Cultural Approach to the History of Ethnic Groups residing along the Irrawady and Salween rivers

研究代表者

新谷 忠彦（SHINTANI TADAHIKO）

東京外国語大学・名誉教授

研究者番号：90114800

研究成果の概要（和文）：メコン河流域に比べて資料の乏しいイラワジ河流域およびサルウィン河流域諸民族の言語・文化データを大量に収集することに成功し、大きな成果を収めた。集められたデータの分析から、カレン系民族の古い歴史の解明に道が開け、言語（民族）接触による北方モン・クメール系民族間の違いの由来が明らかになり、カチン社会の成立過程についても解明できる可能性が出てきた。本研究によって、長年進めてきた、言語をその話し手の社会や文化と関連付けて研究することの意義・有効性がますます明白になった。

研究成果の概要（英文）：The ethnic groups residing along the Irrawady and Salween rivers have been less known compared to those of the Mekong river. Under such background, a huge amount of linguistic and cultural data on them was successfully obtained through our comprehensive fieldworks. By analyzing these data, a lot of striking outcomes were discovered. Among these, a way to clarify the old history of the Karenic groups was opened up and it became evident that the existing difference among the Northern Mon-Khmer groups is due to their ethno-linguistic contacts with the different Tay groups. Our data also suggest a possible explanation of the formation process of the present Kachin society. This project made it clear that our long term research method of using linguistic data in relation to the social and cultural aspect of the speakers concerned is very useful and extremely efficient.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2012年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
総計	13,500,000	4,050,000	17,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：タイ文化圏・イラワジ・サルウィン・パラウン・ワ・プラン・カレン・ラワン

1. 研究開始当初の背景
現代言語学理論の基礎となったのは、大部分

がヨーロッパの言語研究から生まれている。
ところが、印欧語のような短期間に他の言語

(民族)を駆逐して広がった言語と、東南アジア大陸部のように長年にわたって異なる言語が接触し続けてきた地域の言語では、当然のことながら、言語変化のパターンに違いが見られる。このため、より広範な言語をカバーできる理論構築には、東南アジアのような、長年にわたって異なる言語が接触し続けた地域の言語研究を進める必要がある。

また、東南アジアの言語研究には、当該言語の話し手の社会・文化を考慮に入れない研究は成り立たず、複数の言語を視野に入れた地域的な研究も不可欠である。さらに、東南アジアのこうした言語状況は、とりもなおさず、言語データの中に歴史研究の資料となるものがある、ということでもある。こうした観点から、長年にわたりタイ系民族を中心に周辺民族をも含めた複合民族文化交流圏としての「タイ文化圏」研究を進めてきた。

一方、伝統的な東南アジア大陸部の歴史研究は、支配民族が書き残した文献資料に多くを依存しているものである。更に、タイ文化圏を中心とした地域に関する資料は、政治的・地理的に調査が困難な状況が長く続いたこともあって、量的に極めて少なく、また、わずかに存在する断片的な資料も、支配民族から眺める政治的なバイアスのかかったものばかりで、こうした状況下では新たな歴史研究の道を開くことは不可能である。

以上のような状況認識から、これまでの常識を打ち破り、非伝統的な手法を駆使して東南アジア大陸部の言語研究、歴史研究に革新的な道を開くことを目指した長期的な研究計画を立ち上げたのが1995年である。その時の大きな目的は二つあった。第一には政治的バイアスのかからない科学的な新しい言語・文化データを自ら現地で大量に収集することであり、第二にはそうして集められたデータを歴史研究の資料として使うことである。

計画は順調に進み、数々の新しい成果が生まれる中で、メコン文化圏に比べてはるかに資料の乏しいイラワジ文化圏、サルウィン文化圏に存在する民族の言語・文化資料を重点的に収集する必要性を認識し、本研究計画の作成に至った。

2. 研究の目的

本研究課題は次の三つの大きな目的を持って企画された。(1) これまで長年にわたり「タイ文化圏」研究を進める中で、この地域には大河流域文化圏が存在することが分かってきた。それは、東の方から、紅河流域文化圏、メコン流域文化圏、サルウィン流域文化圏、イラワジ流域文化圏である。多くの方は国境で隔てられた国家に重点を置いてこの地域を眺めることが顕著であるが、これで

はこの地域の言語・民族を正しく把握することはできない。この四つの流域文化圏の中で、特に資料の乏しいサルウィン河およびイラワジ河の流域文化圏に分布する民族に焦点を当て、言語および文化資料を大胆なフィールドワークによって大量に収集すること。

(2) 従来型の、支配民族が残したフィルターのかかった文献資料からではなく、こうして集められた資料を駆使して、被支配民族にも焦点を当てながら、当該地域の歴史研究を行うこと。特に、被支配民族が果たした歴史的意義を、政治的な偏向から脱して正當に評価すること。(3) 言語資料を単なる言語研究のためだけに使うのではなく、その話し手の社会や文化と関連付けた研究の中で使うこと。言語資料は従来、言語学の領域でしか使われてこなかったが、当該民族や歴史に関するたくさんのデータが詰まっており、これらを上手に利用して民族研究、文化研究、歴史研究に役立てる。

3. 研究の方法

研究対象としている地域は、政治的・地理的条件から、従来型の調査では十分な成果が期待できない。政府の許可の取得が難しかったり、まともな道路がなかったり、水がなかったり、熱帯病が蔓延していたりと、調査には多くの困難がある。特に、現地話話者を十分な時間使うことができない状況下では、短時間でできるだけ多くの成果を上げるように工夫しなくてはならない。そこで、先ず、こうした厳しい条件下で最大の成果を上げられるよう、全く新しい言語調査票を作成した。従来広く使われている調査票は、このような環境ではほとんど役に立たないからである。そのうえで、タイ、ミャンマー、中国雲南省、ラオスにおいて可能な限り多くの言語・文化の調査を行った。特定の言語や言語グループに絞らなかったのは、上に述べたように、当該地域においては特定の言語や言語グループに絞ることでは十分な研究成果が得られないからである。また、言語調査は常にその話し手の社会や文化と関連付けて行われなくてはならない。言語・文化一体の調査により、従来型の文献研究では分からない、被支配民族が当該地域の歴史の中で果たした役割を明らかにできる可能性がある。更に、従来重視されてこなかった、タイ系少数民族で書かれた文献や、少数民族が書き残したわずかな文献の収集・整理・解読にも努めた。

4. 研究成果

本研究課題の遂行によって、以下のような画期的成果が得られた。(1) 資料収集できた言語(民族)は、モン・クメール系言語、カ

レン系言語、チン系言語、ラワン系言語、ナガ系言語、ミャオ・ヤオ系言語と、多岐広範囲にわたり、その中にはこれまで全く知られていなかった言語、名前は知られていても科学的データのほとんどなかった言語が多数含まれており、データ収集できた言語はすでに100言語を上回り、当該地域に関するデータ収集に関して世界で最先端の地位を獲得した。(2) こうして集められたデータを駆使することによって、これまでほとんど分かっていなかったカレン系民族の古い時代の歴史の解明に道が開けてきた。つまり、カレン系民族はイラワジ河沿いにビルマ族が南下してくる時よりはるか前に、イラワジ河を南下し、その中流域に展開していたと考えられる。このことはカレン系言語とラワン系言語の親縁性から窺い知ることができる。(3) カレン系言語には多くの未知の言語があり、これまでその全体像は全く分かっていなかったが、本研究により、32種類の言語・方言のデータ収集に成功し、その全体像がはっきりしてきた。この言語群に関するデータの質と量では世界で群を抜いている。(4) タイ系言語は当該地域に多くのグループが存在するが、彼らの言語の間にはそんなに大きな違いはない。しかし、彼ら同士は異質性を強く意識しており、こうした意識の違いはサルウィン文化圏とメコン文化圏のの違いに由来するものである。サルウィン系タイとメコン系タイは、彼らの間では違った「民族」として理解されている。(5) 北方モン・クメール系言語(民族)の間の違いの多くは、彼らが接触したタイ系民族の違いに由来するものである。パラウンはサルウィン系タイとの接触で自身のアイデンティティを獲得し、プランはメコン系タイとの接触でアイデンティティを獲得したのに対し、ワはそのどちらのタイとも距離を置くことによってアイデンティティを獲得した、と考えられる。(6) カチン社会はジンポ族がジンポ語をリングフランカとして異言語(民族)を束ねた社会で、シャン語をリングフランカとして異言語(民族)を束ねているシャン社会と非常に良く似た構造を持っている。(7) ジンポ語にはある種のナガ語との親縁性が認められ、今後の研究によってカチン社会の成立過程が明らかになる可能性がある。(8) 言語(民族)には分化して出来上がっていったグループと、複数のグループが融合して出来上がったグループがありそうである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① DANIELS Christian, Script Without Buddhism: Burmese Influence on the Tay (Shan) Script of Mäng² Maaw² as seen in a Chinese Scroll Painting of 1407, *International Journal of Asian Studies*, 査読有, Volume 9, Part 2, 2012, 147-176
- ② DANIELS Christian, Agricultural Technology and Consolidation of Tay Polities in Northern Continental Southeast Asia during the 15th Century, *Southeast Asia in the Fifteenth Century: The China Factor*, 査読有, 2010, 246-270
- ③ SHINTANI Tadahiko L. A., YAMADA Atsushi, The Notion of Junglefowl and Domestic Chicken Reconsidered through Linguistic Data on Some of the Hill Tribes of Northern Thailand, *Chickens and Humans in Thailand: Their Multiple Relationships and Domestication*, 査読有, 2010, 118-141
- ④ 唐立 (クリスチャン・ダニエルス), 18, 19 世紀雲南民間天然資源管理措施初探, *明清以来雲貴高原的環境与社会*, 査読有, 2010, 302-313
- ⑤ 新谷忠彦, 言語と民族, タイ文化圏の中のラオス—物質文化・言語・民族—, 査読無, 2009, 193-205

[学会発表] (計 12 件)

- ① ダニエルス・クリスチャン, 東南アジアにおける茶の消費の仕方, 2012年6月3日, 東南アジア学会第87研究大会, 京都文教大学
- ② SHINTANI Tadahiko, Research on the Tay Cultural Area — Its basic idea, output, and perspectives —, *Linguistic perspectives on the History of Southeast Asia*, 2012年2月24日, 京都大学
- ③ DANIELS Christian, An Introduction to the Shan Manuscripts in the Scott Collection, Cambridge University Library, Needham Research Institute Text-Reading Seminars, 2011年11月18日, Needham Institute(UK, Cambridge)
- ④ DANIELS Christian, The biography of Xu Xiaoke 徐霞客 in Qian Qianyi's 錢謙益 Muzhai Chuxue Ji 牧齋初學記 of 1643, Needham Research Institute Text-Reading Seminars, 2010年10月15日, Needham Research Institute(UK, Cambridge)
- ⑤ ダニエルス・クリスチャン, 18世紀後半～19世紀前半における地域住民の天然資源保護・管理—元江流域・メコン川流域を事例として, 2009年11月7日, 史学会107回大会, 東京大学(本郷)
- ⑥ SHINTANI Tadahiko, Recherches linguistiques sur l' Aire Culturelle Tay, *Langues et Civilisations à Tradition Orale*, 2009年10月7日, Centre A.-G. Haudricourt

(France, Paris)

〔図書〕 (計4件)

① SHINTANI Tadahiko, ILCAA, A Handbook of Comparative Brakaloungic Languages, 2012, xvi+148

② SHINTANI Tadahiko, ILCAA, The Mien Language of Jinping County, 2011, xi+452

③ SHINTANI Tadahiko, ILCAA, The Pyen (or Phen) Language, 2009, x+224

④ 新谷忠彦, クリスチャン・ダニエルス, 園江満 (編), 慶友社, タイ文化圏の中のラオス, 2009, 401

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新谷 忠彦 (SHINTANI TADAHIKO)

東京外国語大学・名誉教授

研究者番号：90114800

(2) 研究分担者

ダニエルス クリスチャン (DANIELS CHRISTIAN)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：30234553